

モノづくり精神の原流

— 今日に問われているもの —

職業能力開発総合大学校 田中 萬年

猿が“道具”を使うことは珍しくなく、カラスが棒を使って古木の中の虫を追い出して食べる、ということが近年の研究で知られています。これらのことから類推すると、人間は恐らく二足歩行をする前からそのような道具使いをしていたのでしょう。本格的に道具を作り、モノづくりを始めたことが残っているのは石器時代になります。その後、モノづくりは発展し、今日の文明と文化を築きました。しかし、一方では痛ましい破壊も起きており、モノづくりの意味を考えねばならない時代になっています。

作品を大切にするという事は「もの」は生きていると考えるからです。「もの」という言葉には「意識」という意味もあります。人形供養は、人形が人に似ているから霊が宿ると考えるために行われているのですが、モノそのものの供養も昔からわが国では行われてきました。有名な針供養にはじまり、様々な道具、様々な作品（モノ）の供養が行われています。モノを大切にしている表れです。それでは、わが国においてモノづくりの仕事を専門的に担ってきた職人衆はその精神をどのように受け継いでいるのでしょうか。

ところで、わが国の仏教徒の中では聖徳太子信仰が続いています。一般の人だけでなく、職人集団が営む太子講が各地で行われています。その経緯には、太子が職人を重視したことがあるようです。これは太子が大陸から職人を招いて、わが国にその技術を定着させたということから、「技術の神」と崇められているためでしょう。太子は職人を事故から守り、技を手助けする、と職人から信仰されているのです。

このような職人の太子講は室町時代から広まったようです。

一般に太子像が持っているのは香炉ですが、職人が行う太子講で使われる掛け軸は、曲金を持っている姿を画いた太子像です。曲金とは、日本建築には無くてはならない日本独特のモノサシです。その曲金を持っている写真のような太子像が、兵庫県加古



鶴林寺所蔵

川市の鶴林寺に奉納されています。

鶴林寺は聖徳太子が朝鮮の僧、恵便法師に仏教を学んだこの地に建てた刀田山四天王寺聖霊院がそのはじまりといわれます。鶴林寺は播磨の法隆寺ともいわれ、本堂と太子堂は国宝です。特に、太子堂は現存する最古の法華三昧堂とのことです。その他、

重要文化財の様々なお堂や仏像、仏具、絵画が所蔵されています。当然ながら鶴林寺でも太子講が盛大に行われています。太子の命日が旧暦2月22日のため、3月21～23日の3日間は参拝者で賑わうとのこと。

ところで、法隆寺を守ってきたのは宮大工でした。最後の法隆寺棟梁といわれた西岡氏は法隆寺宮大工の口伝を伝えています。その100以上の中から、われわれが直ぐにでも学ぶべき口伝を選んでみましょう。

○木は生育の方位のままに使い

○堂塔の木組みは寸法で組まず木の癖で組め

これらは材料の利用法を述べたものですが、モノを大切に自然の活用であり、人間にも通じることです。したがって

○木の癖組は工人たちの心組み

という口伝があるのも頷けることです。そして、職人の創造性を讃えた口伝として

○諸々の技法は一日にして成らず、祖神たちの神徳の恵みなり。祖神忘るべからず

があります。科学・技術が確立していない時代に今日の技術でもって困難といわれている法隆寺を建立した職人たちを讃えた言葉です。

そして棟梁の心構えとして

○工人たちの心組みは匠長が工人らへの思いやり

○百論をひとつに止めるの器量なき者は惧みおそれて匠長の座を去れ

というのがあります。これらは指導者としてあらゆる場面に望まれることでしょう。人の和をまとめる大切さを説いています。

このような口伝が法隆寺に伝わっているということは、太子が職人を尊重していたことと無関係ではないでしょう。だからこそ、職人の太子講が今日まで継承されているのだと考えられます。

宮大工が法隆寺を守ってきた、ということは職人がモノを大事にしてきた、ということです。この精神はどこから来たのでしょうか。

太子は戦火を沈めるために尽力したと伝えられています。このような平和主義と職人の精神には共通するものがあると思われます。それは「十七条の憲法」第1条の「和なるを以て貴しとし、忤ふること

無きを宗とせよ。」に表れているといえます。

ところで、「聖戦」を唱えない宗教としては仏教はその代表です。それは平和へ通じます。モノづくりと、平和の推進は聖徳太子により広められ、守られてきたといえます。

職人は作ったものを大事にし、より良いモノを作ろうとするため、それを破壊する機械を考えることはありません。つまり、モノを大切にすることは暴力への否定がなければなりません。モノを大切にすることは自分自身を守ることにもなります。職人の太子講ではこのようなモノへの気持ち、平穏を守り続けるという精神も学ばれているはずです。

近代になり、経済的拡大のために植民地化が進み、そのために地球上で戦火が絶えませんでした。今日でもその延長で続いているようです。モノづくりは、平和をも愛さなければ守れないのだということを考える必要があるのではないのでしょうか。

○神仏をあがめずして社頭伽藍を口にすべからず

特に、上の口伝はわれわれが問い掛けられている言葉です。法隆寺に限らず、あらゆるモノを大切に思想を持たずにそれを作ることは自家撞着です。モノづくりは、モノづくりへの愛がなければ成し遂げられないはずだからです。

どのような宗教でもその発祥は平和の希求であったはずですが。しかし、パーミヤンの石仏が世界の反対を押し切って爆破された記憶が未だ生々しく残っている今、そして世界がキナ臭い今、上の口伝は真剣に再検討すべき言葉といえます。

戦禍は最も環境を破壊します。今後は、環境を守るという方向が大切なことは誰でもが認めています。今後求められる人間としての行動の根本のはずです。このようなモノ作りの精神は太子の教えにその源流があったといえそうです。

<参考文献>

西岡常一『木のいのち木のこころ(天)』、草思社、1993年12月。

梅原猛『梅原猛の授業 仏教』、朝日新聞社、2002年2月。

田中萬年『生きること・働くこと・学ぶこと-「教育」の再検討-』技術と人間、2002年4月。

田中萬年編著・鈴木建夫校閲『仕事を学ぶ-自己を確立するために-』、実践教育訓練研究協会、2004年3月。